

巻頭言 「観の転換」

小田原市教育研究所長 中畑 幹雄

先日、ある学校の学校だよりで、「1年生が生活科で育てている朝顔のつるがぐんぐん伸びて地面を這うようになってきているのに、子どもたちが『つるを何とかしたい』と気付くまで待っている。先回りしてお膳立てするのではなく、子どもたちが困って悩み、考える機会を保障することに心を砕いている。」という記事を目にしました。今、声高に叫ばれている「教える」から「学ぶ」へという「授業観の転換」を表している素敵なエピソードだなと感心して拝見しました。このように対応できる力は、一朝一夕には身に付きません。教職員自らが進んで自己研鑽に励み獲得していくしかありません。

一方、教育研究所主催の自由参加による「おだわら未来学舎」が、毎回盛況です。勤務時間外の忙しい夜の時間帯における開催にもかかわらず、リモートによる参加も含めて、多数の参加者がいられることはうれしい限りです。現場の方々のご努力に、頭が下がる思いです。「研修観の転換」では、研修者自身がキャリアに応じて身に付けることが望まれている力を把握し、自らの研修計画を立案し、研修に取り組まなければなりません。

「…ああ 答えがある問いばかりを 教わってきたよ だけど明日からは 僕だけの正解をいざ探しにゆくんだ また逢う日まで…」 RADWIPS 「正解」 作詞作曲：野田洋次郎の一節です。

VUCA の時代、未来を拓く子どもたちの誰もが「自分だけの正解」に辿り着けることを願ってやみません。そのために、私たちが本気で取り組まねばならないことが「観の転換」です。

研究所便り 「これからの教育を共に考える」～おだわら未来学舎～

教育指導課指導主事 中野加弥子

今年度のおだわら未来学舎は9月20日をもって年間4回の開催を終えました。1回目は小林宏己先生をお迎えして「探究」をキーワードにお話しいただきました。2回目は、横浜国大の村上唯斗先生に「複線的な学び」のためのICTの活用を、第3回は八三財団代表理事の齊藤修一氏に「人生100年時代におけるLIFE DESIGN」についてご講話いただきました。

第2回では実際にICTを活用した研修で、出席の先生方は学習用端末を持ち寄り新しく取り入れられたチャットアプリを使って、お互いの学習状況を共有する体験をしました。このアプリの活用で、個別に学習を進めつつ子ども同士が関わりをもったり、担任の先生がそれぞれの子どもの学習状況を把握し適切な支援をしたりできるようになります。参加の先生方が集中して課題に取り組む姿が印象的でした。また早速チャットを学習の中で活用する計画を進める学校もありました。

第3回の講師齊藤修一氏は、地域振興・次世代支援事業や公民連携のスタートアップ支援拠点の運営などを行う八三財団の代表理事を務めています。講演では、人生をジグソーパズルに例え、より多くのピースを集めること（関係性の輪を広げる）・ピースの質を高めること（環境問題と向き合う）・ピースを効果的に組み合わせること（自分の独自性を追究する）が「人生100年時代におけるLIFE DESIGN」には大切だとお話しいただきました。参加者の先生方は、ご自身の人生について考えたり関わっている子どもたちのこれからについて考えたりすることができました。みなさん新たな視点を得、わくわくした気持ちで会場を後にしていました。

小さなころみ 「共同研究」～小田原版STEAM教育の充実に関する研究～

教育指導課指導主事 若月 拓也

〈研究員〉◎田中 穂積（城北中）／○角野 篤（千代中）

山口 夏季（白鷗中）／生月 美帆（鴨宮中）／福岡 生実（泉中）

本研究は、令和5年度までに行われた、小田原版STEAM教育に関する研究に続き、「探究のプロセス」を経験することを通して、多種多様な地域の問題に取り組む実践を広げていくことと、生徒の探究学習がより深まる実践を市内中学校に展開していくことを目的としています。

「総合的な学習の時間」の探究的な学習において、小田原に目を向け、地域の課題と向き合い、問題解決を図る中で、これまで聞くことができなかった地域の方の声を聞くことができるなど、新たな見方・考え方を発見する機会が増えることになります。そして、生徒たちは本物の社会とのつながりの中で、社会そのものの考え方や、課題解決の難しさを知ること、自己の力が実社会に役立っていると実感を得られる経験を積むことができると考えます。

令和6・7年度の2年間で、小田原版STEAM教育の全校を対象とした導入に向けて、生徒の主体的な探究を引き出す教師側のファシリテーションスキルの向上、探究のプロセスにあった具体的な指導方法の提示、生徒の解決策やアイデアをアウトプットするまでの学習の経過をみとる視点を深めることにおける研究を進めているところです。

ある教室から 「子どもたち一人ひとりが大切にされる授業」

教育指導課指導主事 栗原 尚美

ある学校の道徳の授業を参観しました。このクラスには、外国から来たAさんが在籍しています。英語でのやり取りはできるのですが、日本語で話したり、読んだり書いたりすることが難しいお子さんです。「でも、クラスの友だち全員の名前を覚えているんですよ。」と担任の先生はとてもうれしそうに話してくださいました。このAさんが友だちと共に学習に参加できるよう、先生は授業の中でいくつかの工夫をされていました。

一つ目は、教科書です。日本語の教科書では内容理解が難しいので、先生は翻訳アプリを活用して、英語で書かれたプリントを用意していました。二つ目は、ワークシートです。こちらも英語にしたものが用意されていました。先生は、Aさんにワークシートを渡し、「○○（Aさんの名前）、Write your name.」と声をかけます。すると、Aさんは自分の名前を英語で書き、ワークシートの文を読み始めます。ワークシートに自分の考えを書く場面では、Aさんも集中して英語で考えを書いていました。

話し合いの場面では、先生がそっとAさんのワークシートをのぞき込み内容を確認すると、その意見を英語でクラス全体に紹介した後に、今度は日本語で紹介しました。話し合い活動に参加することは難しかったAさんですが、先生を介してクラスの友達に自分の考えを伝えることができました。

英語に訳した教材の準備、先生が簡単な英語で積極的にAさんに声をかけることやそのやりとりを他の子どもたちが見ること、英語と日本語で周りの子どもたちにAさんの考えを伝えること、多様性を認め合うことが必要とされる社会において、どれも大切な支援となります。そしてその支援は、Aさんをはじめ、クラスの子どもたち一人ひとりの人権を大切にする担任の先生の気持ちがあってこそのものであるということを強く感じました。